

令和 5 年 6 月 17 日現在

機関番号：33404

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K10329

研究課題名（和文）重度の精神障がい者への多職種アウトリーチ支援における現象学的研究

研究課題名（英文）A Phenomenological Study in Multiprofessional Outreach Support for Persons with Severe Mental Disabilities

研究代表者

近田 真美子（konda, Mamiko）

福井医療大学・保健医療学部・准教授

研究者番号：00453283

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：ACTスタッフは、利用者に振り回されるくらい寄り添い、苦楽を共にする中で利用者への眼差しが変化していた。そして、医学モデルの優位性を下げ、人間らしさの本質や日常の良識に目を向けながら利用者自ら思考し、責任を負い、夢や希望といった自己実現を目指しながら地域で自分らしく生きることを支えていた。この利用者の主体化への支援こそが、地域生活の維持から、リカバリーという状態へと方向づけていくための分岐点となっており、結果として利用者の精神症状の安定をもたらしていた。日本の精神医療を地域生活中心へと転換するためには、こうした専門性を携えながら、利用者を中心に据えた支援体制の構築を図ることが不可欠である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで、地域生活支援に携わる実践に関する研究は、実践内容をカテゴリー化または数量化して示すなど、抽象度の高い質的・量的研究が多かった。本研究の成果は、支援者の実践を事象への意味づけという段階から可視化したことで、実践内容を他者と共有可能な形として提示した点にある。日本の精神医療を「地域生活中心」へと推し進めていくための重要な要素の1つである実践スキルの構築に向けて、必要な視座を与えるものと考えられる。くわえて、現象学的手法を用いて実践の構造を可視化し提示することで、実践者ならびにチームメンバーの新たな気づきと省察を促すことにも寄与した。

研究成果の概要（英文）：The ACT staff members were so close to the users that they were swept away by them, and as they shared their struggles and joys with them, the way they looked at the users changed. They supported the users to think for themselves, to take responsibility, and to live their lives in the community in their own way while aiming for self-realization of their dreams and hopes, lowering the superiority of the medical model and focusing on the essence of humanity and everyday common sense. This support for the independence of the users was the turning point in the direction from maintenance of community life to recovery, and as a result, the users' psychiatric symptoms were stabilized.

In order to shift Japanese psychiatry to a community life-centered approach, it is essential to build a support system that focuses on users while maintaining such expertise.

研究分野：精神看護学

キーワード：現象学的研究 ACT アウトリーチ リカバリ 精神医療 実践知

1. 研究開始当初の背景

わが国では、世界的にも高水準である精神入院患者数を減らし、地域生活への促進を図るため、地域包括ケアシステムの構築をはじめ様々な取り組みがなされてきた。しかし、その実現には、地域で暮らすための社会資源の確保や住民の偏見の解消、支援に携わる専門家の力量を高めていくなど様々な取り組みが必要になってくる。

そんな中、特に「地域生活中心」の切り札として注目を集めてきたのが「ACT」(Assertive Community Treatment、包括型地域生活支援プログラム、以下 ACT と略す)である。ACT とは、重い精神障害を抱えた人たちが住み慣れた地域で安心して生活できるよう 24 時間 365 日にわたって支援を行うプログラムであり、生活の質や精神症状の改善、満足度などに一定の効果があることが多くの先行研究で示されている。日本では、2003 年に国立精神・神経センター国府台地区において本格的な日本版 ACT が導入されたのを皮切りに、全国各地でチームが立ち上がっている。

ACT の対象者は、重度ということから精神症状が強く医療の介入を拒否したり、そもそも治療の必要性を認識していない方や未治療の方が多い。そういった点からすると、ACT で働く専門職は、利用者との関係性を構築するために、これまで病院という場で身につけた医学モデルにもとづいた支援とは異なる専門性を身につける必要があると考えた。

ACT スタッフのスキルに関しては、いずれも実践者に共通してみられる事象を概念化し一般可能性を目指す方法論に留まっており、専門家 1 人ひとりの豊かな経験や実践の構造の成り立ちが見えにくいのが現状であった。そこで、「精神症状」への眼差しや、利用者との「関係性」といった可視化しにくい事象を取り扱う本研究においては、現象の成り立ちや構造を可視化し他者と共有できる形にしていく取り組みが重要ではないかと考え、個別の経験を内面的視点から描き出す際に有用な現象学的手法を用いることとした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、重度の精神障害者への多職種アウトリーチ支援における実践を、現象学的手法を用いて記述的に明らかにすることである。

3. 研究の方法

データ収集方法ならびに分析方法は、以下の(1)(2)(3)とした。ただし、(2)に関しては、あくまでも(1)の個別インタビューを補足するものとして実施した。

(1) 個別インタビューの実施

承諾が得られたスタッフ 10 名(看護師、精神科医、精神保健福祉士など職種ならびに経験年数は問わない)に対して、個別インタビューを 1~3 回実施した。インタビューは、現象学手法に則り「ACT でどのような実践を行っているか、お聞かせ下さい」のように、ACT での実践内容について自由に語っていただく非構造化面接の形をとる。インタビュー時間は 1 回につき 1 時間~2 時間程度であった。

(2) フィールドへの参与観察

スタッフミーティングやカンファレンスへの参与
アウトリーチ訪問への同行

(3) 分析方法

語られたインタビュー内容を逐語録におこし、データを繰り返し読みながら、語り手の口調、言い回し、言い淀み、頻出する単語といった「固有の言葉使い」に着目することで、実践者の実践の構造を明らかにしていく現象学的手法を用いて分析を行った。

4. 研究成果

1) 個別の実践の成り立ち

【看護師 B 氏】

B 氏の実践は、利用者の主体化を図るために必要な素になって考えるという健康的な心を醸成するため「待つ」という在り方で関与していた。この「待つ」という行為が成立するためには、支えられてきたという利用者の安心感と彼らの成長した姿が見えることでの信頼と、病気の影響ではなくその人の素の姿が見えることで生まれた「信じる」という思考が基盤となっていた。

そして、「待つ」という支援者中心の支援から利用者中心の支援へ転換することで、利用者の地域生活の継続を可能にしていた。

【精神科医 内山氏（仮名）】

内山さんの実践は、利用者や家族の安心感と信頼感を育みつつ気軽に相談してもらえ関係性を意識しながら、利用者の希望する地域生活を可能な限り維持するため「様子見ましょうか」という構えで存在していた。この「様子見ましょうか」は、地域生活と精神科病院への入院の転換点において浮上するが、この時間的猶予を含む眼差しが成立する背景には、自ら生活の場に向いたり症状を抱えながらも地域で今まで通りの生活を維持できるという現実を知るといった経験が存在していた。

そして、メンバー間のフラットな関係性が薬物療法や精神症状に固執しないという内山さんの見方を支えており、それにより普通の生活や性格、人間関係といった部分に目を向け価値を置くことを可能にしていた。薬物療法と人間関係や生活といった事象が平等に扱われることにより医学的な介入が再び専門性を帯びる形で活用されるようになっていた。

【看護師 C 氏】

C 氏は、幻聴や妄想がある利用者の世界を「この世界」と称し、世界の意味内容は良く理解できないが、利用者には、孤独や寂しさといったネガティブな感情が存在しており、それを能動的に捕まえようとしていた。

そして、C 氏は、「心配」と対比関係にある「安心」という「人として当たり前」の感覚を第一優先とし、利用者の興味・関心に焦点をあてながら「実験」や「工夫」を凝らした実践を展開していた。この「人として当たり前」の感覚が C 氏の実践の基盤となり、医療制度の規範や枠組みを変容させるような実践へと繋がっていた。変容する中で、予め目標を設定するという思考は消失し、代わりに「待つ」行為が重要な価値をもつようになった。

こうした実践を経て「孤独」だった利用者は C 氏と「一緒に」苦楽を享受することで、現実世界に生きる C 氏への信頼を得て、希望や意志といった「人として当たり前」の「ニーズ」を表出できるよう回復を遂げていった。

【精神科医 K 氏】

K 氏は、利用者の地域生活の維持を目指すべく、精神症状ではなく「困りごと」という枠組みで取り扱うことで、一方的かつ抑圧的なコミュニケーションを回避し、関係性の反転を含む双方向のコミュニケーションを展開していた。こうした関係性を反転させることが、利用者の地域生活を可能にするための基盤であり「治る」から「暮らす」ことへの分岐点となっていた。

そして、地域生活を継続するための要件である他者との付き合いが可能かどうかに着目しながら、利用者が支援を受け入れたり、自分の考えや欲求を適切表出できることといった信頼という感覚に基づく関係性の変化の兆しが見えた時点で、利用者が主体的に薬物療法に関与できるよう、彼らの思いを聞きながら、必要に応じて適切な薬物量を見極め、投与していた。

【星野看護師（仮名）】

星野さんの実践は、表面的には捉えにくい事象への関心と「難しい」という感触を出発点として「支援しなきゃいけない」という規範を含む、必然性を帯びた形で展開していた。

そして、その実践は、利用者自身で「考える」という「苦労」や「経験」を通して「責任」を負うことで「できることを増や〔す〕」支援であった。こうした利用者の主体化を目指して働きかける支援が「意味」のある支援である。「ホールディング」は、規範に促されて発動した支援を他者との関係を繋ぎなおしながら利用者の主体化へと繋いでいくためであり、距離を押し量りながら接近し利用者の気持ちや生活状況の背後にあるものを読み取るのは、支援を「意味」のあるものへと方向付けていくための基盤となっていた。

【精神保健福祉士 J 氏】

J 氏は、「本人が社会生活をしていくってところのゴール」を目指しながら、「関係づくり」「ACT だけでは支えられない」「人と場の拡大」「医療から社会生活へのシフトチェンジ」「自己実現」というモチーフにより以下のような仕方で成立していた。

J 氏は、社会から孤立する形で存在していた利用者に対して、振り回されるくらい寄り添い続けることで支援者として認識される関係づくりを醸成していた。そして、長期的な視点を踏まえつつ「ACT だけでは支えられない」という支援の限界を起点として、地域の多様な人との出会いや出入りする場を拡大しながら利用者以外の顔や側面を見出すことで、地域生活システムの構築を目指すべく医療から社会生活へのシフトチェンジを図っていた。さらに、自分本位からの脱却を目指すべく現実を提示しながらいつか到来する「自己実現」を支えることができるような支援を展開していた。

2) 重度の精神障害者への多職種アウトリーチ支援における実践とは

ACT スタッフらは、支援開始直後から展開される、利用者には振り回されるくらい寄り添い、苦楽を共にする中で利用者への眼差しが変化していた。そして、医学モデルの優位性を下げ、人間らしさの本質や日常の良識に目を向けながら、利用者自ら思考し、責任を負い、夢や希望といった自己実現を目指しながら地域で自分らしく生きることを支えていた。この利用者の主体性を回復するという主体化への支援こそが、地域生活の維持という状態にとどめておくことから、リ

カバリーという状態へと方向づけていくための分岐点となっており、結果として利用者の精神症状の安定をもたらしていた。

日本の精神医療を地域生活中心へと転換するためには、こうした専門性を携えながら、医療者中心ではなく利用者を中心に据えた支援体制の構築を図ることが不可欠であり、この方向性を見定める際の鍵となるのが利用者とともに行為しながら自らの実践を省察し、リカバリー概念を身体に落とし込む直接性の水準における経験であることが示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 近田 真美子 | 4. 巻 5 |
| 2. 論文標題 意味のある支援：重度の精神障害者の地域生活を支える看護実践の現象学的研究 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 臨床実践の現象学 | 6. 最初と最後の頁 16～29 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/87537 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 近田真美子 | 4. 巻 65 |
| 2. 論文標題 －市民としての様々な顔をつくる－重度の精神障害者の地域生活を支えるACT実践の現象学的研究 - | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 病院・地域精神医学 | 6. 最初と最後の頁 42 - 49 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------------|
| 1. 著者名 近田真美子 | 4. 巻 48 |
| 2. 論文標題 看護とACT | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 精神療法 | 6. 最初と最後の頁 214 - 215 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 近田真美子 |
| 2. 発表標題 地域における「本当の支援」とは－ACT実践の現象学的研究－ |
| 3. 学会等名 日本精神保健看護学会 第30回学術集会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 近田真美子 |
| 2. 発表標題 看護師Cさんの実践の構造－重度の精神障がい者への多職種アウトリーチ支援における現象学的研究－ |
| 3. 学会等名 第18回 日本看護技術学会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--------------------------------------|
| 1. 発表者名 近田真美子、小村絹恵、安里順子、森野貴輝、福山敦子 |
| 2. 発表標題 イタリアの精神医療から、私たちの実践を考える |
| 3. 学会等名 第29回 日本精神保健看護学会ワークショップ |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 近田真美子 |
| 2. 発表標題 ほっとけない 重度の精神障がい者への多職種アウトリーチ支援における現象学的研究－ |
| 3. 学会等名 第105回 臨床実践の現象学研究会 |
| 4. 発表年 2018年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

近田真美子 (2022) 重度の精神障害者の地域生活を支えるACT実践の現象学的研究, 大阪大学大学院人間科学研究科 人間科学専攻基礎人間学講座 哲学と質的研究分野, 博士論文.

6. 研究組織

| | | | |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| | |
|---------|---------|
| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|